

色の月

源氏鶏太

© Keita Genji 1978, Printed in Japan

レモン色の月 いもづき

定価九八〇円

昭和五十三年六月五日印刷
昭和五十三年六月十日発行

著者 源氏鶏太 げんじけいた

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七十一

電話業務部(03)二六六一五一

編集部(03)二六六一五四二

振替 東京四一八〇八

印刷 二光印刷株式会社

製本 神田加藤製本

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目

次

眼	7
レモン色の月	29
百人が見ていた	49
十日間待て	73
四十九日忌まで	99
ロビイに来た客	129
鏡のある酒場	157
手　　鏡	187
末期に見た夢	223
あとがき	250

装
画

黒
崎

彰

レモン色の月

眼

深田泰吉は、急に歩みをとめて振り返った。背後に何かの気配を感じたのだが、しかし、そういう特別な気配を感じさせるような物はそこらになかった。人人は普通に歩いているし、自動車も普通に走っていた。午前八時を過ぎていた。晩秋の今にも雨が降り出しそうな重い雲が街を薄暗くしているが殊更に異様なところはすこしもなかった。人人も自動車も深田に無関心に動いていた。深田の錯覚であつたと思ひやうがなかったし、自分をそう納得させた。深田は、ふたたび歩き始めた。しかし、数歩と行かぬうちにまたしても背後に、しかもこんどは自分を見ている「眼」を感じた。そのことがはつきりと背中に感じられた。それはどこから深田を見つめている眼であつた。もうそうに間違ひないと思つた。深田は、しばらく我慢してそのまま歩き続けた。背後の眼は、深田を追い続けてくる。どこまでもしつように追い続けてくるようだ。深田は、無気味になっていた。振り向くことが妙に怖ろしくなっていた。しかし、このままで振り向かなかつたらもっと怖ろしいことが起るような予感めいた物が深田の気持の片隅にひろがりかけていた。ひよっとしたら何んでもないことかも知れなかつた。恐らくそうに違ひなかつた。二十

八歳の深田は、ただ神経質になり過ぎているのかも知れなかった。

深田は、どうにも我慢が出来なくなつて振り向いた。そして、注意深くそこらを見まわした。しかし、人人も自動車も相変らず深田に無関心に動いていた。並んでいる商店にもいつもと變つたところがなかった。深田は、なおもそこらを見まわしていた。そのとき深田は、自分を見つめていた眼がすうつと消えたのを感じた。はっきりと感じた。こうなると單なる錯覚であつたと簡単に片づけられなくなつてくる。

(いったい、どうして……)

と、思ひたかつた。

深田は、未練たらしくそこらをもう一度見まわしておいて踵^{きびす}を返した。最早背後に何んの氣配も感じなくなつていた。背中が軽くなつていた。今となつてそのことが却^{かえ}つて物足りぬくらいであつた。

深田がこの私鉄丁の沿線のアパートに越して来てから二か月ぐらいになる。その間、いつもおんなじこの道を通つていた。が、こんなことは初めてであつた。

(いや……)

深田は、考え込む顔になつていた。たしか以前にもこんな思いをしたことがあつたような氣がする。たしかなことはいえないが一度か二度。しかし、そのときはそれほど氣にとめなかつたし、勿論、振り向きもしなかつた。そのままで通り過ぎて、すぐに忘れてしまつた。ということは今日ほどには強くそれを感じないですますことが出来たのだ。にわかに深田の不安が深くなつて来た。自分の身邊に何かの不吉な事が起る前兆のように思われた。

駅が見えて来た。たくさんのサラリーマンがその中に吸い込まれてゆく最も活氣に満ちた朝の

眺めであった。深田は、自分もその中に入ってゆきながら、

(バカな妄想はよしておこう)

と、自分にいい聞かせ、満員電車に揺られているうちにすべてを綺麗に忘れていた。

二

十日ばかり過ぎた日曜日の午後二時頃、深田は、アパートを出た。兵藤育子を駅まで迎えに行つてやるためであった。育子は、おなじ会社に勤めていた。二十三、四歳であらう。面長で切れ長の眼尻がすこし上っていて、色白であった。深田は、所属の課も違うし、育子についてはそれ以上のことは知らなかったし、知ろうとも思わないで来た。勿論、育子に特定の男友達があるかどうかは聞いていなかった。その美しさの割にはひっそりと勤めているようなところがあったが、そんなことは深田にとってどうでもいいことであつた。いい直せば、その程度の関心しか持っていなかった。

その育子が金曜日の昼の休憩時間にビルの屋上の片隅で一人で煙草を吹かしていた深田の後からすうつと靴音もなしに寄つて来て、

「深田さんは、こんどT線のSにお移りになったんですつてね。」

と、話しかけて来た。

「ああ、そうだよ。」

深田は、軽くいった。

「どうしてお移りになりましたの。」

「どうしてといわれると困るんだが。」

と、深田は、苦笑を洩らした。

なるべくなら話したくなかった。正直にいったら深田の気のちいさをわ嘸わられるだけであろう。しかし、育子は、じいっと深田の眼を見つめていた。どうしても聞きたいらしかった。深田は、おかしな娘だと思つた。同時に、こういう眼を以前にどこかで見たような気がしたが、いつのことで、どこであつたかは思い出せなかつた。が、何れにしてもそれは育子でないことはたしかなようだ。今までに育子とこのように近近と向い合つて話したことはなかつたし、だからあり得ないことであつた。育子の眼は、深田からはなれようとしなかつた。

深田は、面倒臭くなつた。

「僕の前のアパートの部屋の隣室で心中事件があつたんだ。」

「心中事件。」

育子は、おどろかなかつた。

「正確には心中未遂ということになるんだろうな。女が死んで、男の方が救たすかつた。一説には男は計画的であつたというが証拠はなかつたようだ。」

「男の名は何んといいますの。」

「たしか玉木義男とかいつたな。しょっちゅう表札を見ていたのでおぼえていた。そう、何度か廊下で顔を合せて頭を下げたことがあつた。横着よこづかそうで印象がよくなかつた。だからこんな男と心中するなんて女の気持がわからぬと後で思つたくらいだ。騙だまされていたのでないかとひどく哀れに思つたことがある。」

「哀れ……。」

「しかし、僕は、女の顔も見えていないんだよ。声だけは壁越しに何度も聞いたが。」

「お聞きになりましたのね。」

「まあね。」

深田は、ほかした。それ以上にいいなくなかった。いえば死者を冒瀆することになりかねない。あの閨房での声のなまなましさは今も深田の耳の底に残っていた。ああいうことが何度もあって、しかも男を残して死んでしまったとあっては、名も顔も知らぬその女の怨念が今もこの世に残っているとしても不思議でなからう。しかし、深田は、その隣室にいたに過ぎないし、そういう怨念にはあくまで無関係だと思っていた。

育子は、黙っていた。その眼は、遠いあらぬ方を見ていた。

「これでわかったらう、そんな事件のあったアパートから逃げたくなった理由が。」

深田は、結論を急いで、

「しかし、どうして。」

と、ついいわでものことをいってしまった。

「どうしてって。」

「君がそんなことに興味を持ったらしいことが。」

「おかしいですわね。」

「そう。しかし、まあどうでもいいことだ。」

「ね。」

「何。」

「こんどの日曜日にアパートにいらっしゃいます。」

「今のところ別に予定がない。」

「あたし、遊びに行ってもいいでしょうか。」

「君が。」

深田は、あまりの思いがけなさに育子を見た。育子は、見返していた。ニコリともしていなかった。深田は、またしても、

（こういう眼だ）

と、思ったが、いぜんとしてどこで、そして、いつ頃のことであつたか思い出せなかった。

そのことが深田の心に妙に引っかかつて、

「そりゃアかまわんが。」

と、いつてしまった。

「嬉しいわ。」

しかし、そのいい方は色恋に關係があるとは思われなかった。そのことは過去の二人の接觸を考えば当然のことであつた。深田は、ますますわからぬ娘だと思つた。しかし、何かの目的があつてのことに間違ひなからう。独身男のアパートへ訪ねてくるなんて危険が多過ぎる。それを承知の上でのことであつたらその目的が今から氣にかかつてくる。そのときになつて深田は、（ひよつとしたら心中未遂のことに關してのことかも）

と、閃くように思つたが、しかし、あれは自分とは無關係の事件であつたと思ひ直した。

「午後お伺いします。」

「では二時半頃に駅まで迎えに出ていよう。その方が迷わなくていいだろう。」

「迷うなんて……。でも、その方がたすかります。」